清新二中だより

本校教育目標
１　豊かな心で、互いに敬愛できる人　（敬愛）
２　進んで学び、深く考える人　（知性）
３　健康で明るく、自ら鍛える人　（健康）
４　責任を重んじ、勤労を尊ぶ人　（責任）
５　礼儀を重んじ、他とよい関係を築く人（礼節）

能登半島地震

校長　白石　亨

それはあまりにも突然だった。

穏やかな新年を迎えた元日の午後４時１０分、テレビからドキリとする警報音が響き渡ってきた。この音はいつ耳にしても胸が圧迫され、気持ちを暗澹（あんたん）たる思いにさせる嫌な音だ。緊急地震速報を伝えるものだった。テレビにはテロップが流れ、能登半島付近を震源とする大きな地震が発生したことを知らせていた。しばらくすると自宅の建物がゆっくりと大きく、ゆさゆさと揺れ出したので、からだを硬直させて身構えた。「ああっ‥あのときと同じだな」と直感して鼓動が激しくなる。１３年前に発生した東日本大震災。あの感覚と同じだった。１３年間も経っているはずなのに東日本大震災の揺れの記憶が鮮明に蘇り、とても嫌な予感が込み上げてきた。そう、再び東日本大震災のときのような甚大な災害が生じるのではないか、との心配の思いだ。

テレビには「津波！避難！逃げろ！」との赤地に白抜きの大きな文字が映し出され、アナウンサーが叫ぶような声で避難を必死に呼びかけていた。時間が経つにつれて大きな被害の様子がテレビに映し出されてくる。民家が屋根瓦（がわら）の重みに耐えられずに押し潰れ、強固だと思われていた鉄筋コンクリートのビルディングさえも横に崩れて倒壊した。山々も至るところで崖くずれをひき起こし、多量の土砂が道路を埋め尽くして交通網を遮断する。高さ４ｍを超す大きな津波も珠洲市等の沿岸部を襲った。あまりにも大きな被害だった。

どれだけ多くの尊い人命が奪われ、その遺族の方々を深い悲しみの淵に追い込んだのであろうか。そのことを思うと胸が苦しくなる。いたたまれない気持ちになる。被災者の方々の心情を想像するだけで辛くなる。

今から１３年前、東日本大震災により東北地方の太平洋側一帯は壊滅的な被害を受けた。

その発災１年後、東京都教育委員会が主催する岩手県を中心とする被災地の視察に参加した経験がある。現地を訪れると津波で多くの建物が流され、海岸付近一帯は広い荒地が続いていた。想像を絶する強力な津波を受けて学校施設も著しく破壊されていた。特に在籍する子供たちや教職員の約７割もの人命が奪われた小学校の損壊状況はとても痛々しいものがあった。テレビや写真では理解し難（がた）い実際の生々しい現場を目にすることで、地震の怖さを切実に感じるとともに、何があっても子供たちの命を守ることが第一だと痛感させられた。

このときの東日本の光景がフラッシュバックされ、今回の能登半島地震の惨状に重なってきた。

今、この瞬間も、被災した方々は、私たちが想像すらできない苦しい思いをして過ごしている。「明日の水がない」「明日のご飯がない」という危機的状況に陥っている。一刻も早い支援を必要とする人々が大勢いる。

しかし、このような中でも多くの人々が助け合っていることが唯一の救いであるように思えた。災害救助に駆け付けている自衛隊員の方々、地元消防署・消防団・警察署員の方々、不眠不休で情報の収集や支援体制を整える地域自治体の方々は勿論のこと、地域住民の方々がお互いに励まし合い、助け合いながら避難生活を乗り越えようと必死になっている姿がテレビに映し出されてくると、胸が熱くなった。

「天災は忘れた頃にやってくる」との警句は、関東大震災を受け、物理学者・防災学者の寺田虎彦氏が残した言葉である。去年、私たちが住む東京も関東大震災から１００年を迎えた。いつ何どき、東京も巨大地震に見舞われるかわからない。だからこそ、私たちは今回の地震で被災した方々にできる限りの支援を行うことは勿論のこと、自分たちの足元もしっかりと見詰め直し、防災への意識も高めなくてはならないと思う。学校は子供たちの学び舎（や）であるが、発災時には避難所としての重要な役割も担っている。地域の方々、保護者、生徒、教職員とが一体となって、改めて防災への備えを推進しなくてはならないと強く考えている。